

第 67 回日本歯科理工学会学術講演会報告

平成 28 年度春期第 67 回日本歯科理工学会学術講演会が、4 月 16, 17 日に福岡歯科大学歯科医療工学講座生体工学分野教授、松家茂樹先生を大会長として開催された。学術講演会は九州大学医学部百年講堂、懇親会は福岡リーセントホテルで開催された。これらは第 60 回本学術講演会が行われた場所と同じであり、会員の多くが懐かしさを覚えていた。

本大会における一般講演の演題数は、口頭発表が 24 演題（若手研究者部門 1 題を含む）、ポスター発表が 89 演題の計 113 演題であった。また、Dental Materials Adviser/ Senior Adviser 特別セミナーを兼ねた特別講演とランチョンセミナー、企業展示が催された。

会期中は好天に恵まれたものの、会期 2 日前（4 月 14 日）には熊本を震源とする震度 7 の地震が、また当日（16 日）の未明にはさらなる甚大な地震が発生した。会場内では、緊急地震速報のアラームが鳴るという場面も見られた。そのような中でも口頭発表、ポスター発表ともに多数の来場者があり、活発な討論、質疑応答が行われた。

大会初日の口頭発表では、インプラント、細胞・生体組織、金属・機械・技術をテーマとした 11 演題の講演が行われた。ポスター発表では、セメント、接着、コンポジットレジジン、レジジン、CAD/CAM 用材料・技術、臨床応用をテーマとした 46 演題の発表が行われた。特別講演は「バイオ 3D プリンタの開発と組織・臓器作成の試み」との演題で、佐賀大学医学部臓器再生医学講座教授の中山功一先生にご講演いただいた。演者らは接着性細胞が有する細胞凝集現象を応用して、細胞だけで

立体的な臓器・器官を作製する技術を確立し、三次元データと細胞をセットするバイオ 3D プリンタを開発してきた。この画期的な開発により、自分の細胞を用いて任意の細胞配列ができるようになるという。長いチューブ状の組織の作製も成功しており、その構造は実際の血管の構造とも酷似しており、血圧の 10 倍程度まで耐えられることが確かめられている。今後はこの技術を各種構造物にも応用していくという。出席者は大いに感銘を受け、研究の益々の発展を期待した。

大会第 2 日目の口頭発表では、生体用セラミックス、有機材料・臨床応用をテーマとして 13 演題、ポスター発表では、生体材料、陶材、生体用セラミックス、インプラント、金属、器械・技術をテーマとして 43 演題の発表が行われた。ランチョンセミナーでは「独自高分子技術を基盤とした接着材の創成」と題し、サンメディカル株式会社の小里達也氏による、歯質接着性用材料のうち重合開始剤を基盤とした製品開発と製品の諸性能についての詳細な説明を拝聴した。優れた製品を作り出せるのは長年にわたる研究・開発の賜物であり、その後も日々研究を続けていく姿勢に出席者は深く感銘を受けた。

会期直前に隣の県が予期しなかった大震災に見舞われたが、松家茂樹大会長、丸田道人準備委員長をはじめとする運営スタッフの方々のご尽力により、本学術講演会はつつがなく進行し、成功裏に終了した。スタッフの皆様にも深く感謝し、第 67 回日本歯科理工学会学術講演会の報告とさせていただきます。

末筆になりましたが、この度の熊本地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

青木春美

（日本歯科大学生命歯学部歯科理工学講座）

